

平成11年度 リーダーズセミナー in 高知



『心はいつも太平洋ぜよ』



《目次》

- | | | | |
|---------------|---------|-------------|---------|
| 1. 日程表 | 5. 特別寄稿 | 8. リーゼミを終えて | 9. 編集後記 |
| 2. 浜田美穂先生講演録 | ・橋田速生先生 | ・渡辺純一幹事長 | |
| 3. 腰山静雄会長講演要旨 | ・門田豊先生 | ・岡山文昭実行委員長 | |
| 4. リダー選手権大会記録 | 6. 合同稽古 | ・山神眞一先生 | |
| | 7. 審判講習 | ・大塚忠義先生 | |

中四国学生剣道連盟

期間：平成12年3月9～10日

主管：高知大学・高知女子大学

平成11年度リーダーズセミナー日程表

時	日	3月9日(木)	時	日	3月10日(金)
			7:00		起床
			7:30		朝食
			8:40		審判講習
			9:50		リーダー選手権
			12:45		昼食
14:00		開会式	13:20		閉会式
14:30		浜田先生講演	14:30		腰山先生講演
15:30		講演終了	14:40		閉会式終了・解散
16:30		合同稽古			オブションツアー
18:10		夕食			竜馬歴史館
18:40		入浴・自由			
19:45		懇親会			
21:45		懇親会終了			
23:00		消灯			

浜田先生の卓球関係の経歴

昭和44年5月	第29回世界卓球選手権大会（ミュンヘン）に日本代表として出場 シングルス第3位
昭和44年6月	日本代表としてヨーロッパ遠征に参加
昭和46年5月	第30回世界卓球選手権大会（名古屋）に日本代表として出場 ダブルス3位
昭和46年10月	アジア卓球選手権大会に日本代表として参加
昭和46年11月	第1回3A大会（アジア・アフリカ・ラテンアメリカ）に日本代表として参加
昭和47年5月	日本代表としてヨーロッパ遠征に参加
昭和48年2月	日本代表としてヨーロッパ遠征に参加
昭和48年5月	第31回世界卓球選手権大会（ユーゴスラビア）に日本代表として出場 ダブルス優勝
昭和49年2月	日本代表としてフィンランド・スカンジナビア・フランス国際卓球選手権大会に出場
昭和63年4月	日本卓球協会技術専門委員会委員
平成元年7月	第5回アジアジュニア大会（インド）女子監督
平成3年4月	第25回オリンピック（バルセロナ）強化コーチ
平成3年5月	第40回世界卓球選手権大会 女子コーチ
平成5年8月	韓国グランプリ日本代表女子監督
平成11年～	日本卓球協会ジュニア委員会委員（現在に至る）

今回のリーダーズセミナーでは、講師として、かつて卓球の日本代表として世界チャンピオンとなられ、現在は良い選手を育てる事に力を注がれている土佐女子短期大学の浜田美穂先生をお招きして、講演が行われました。

「ピンポン球に魅せられて」

土佐女子短期大学教授 浜田美穂

◎ 卓球との出会い

よく私は卓球をどうして始めたのか、いつから始めたのか、聞かれますが、きっかけはとても些細なことです。小学生の頃、近所の方が家の前で仕事が終わって、5時くらいからバドミントンをして遊んでくれました。夕方になると羽根が見えなくなったり、すぐに夕食だと呼びに来られたりしたので、中学にはいったら、思いっきり親に呼びに来られないような部活をしようと思っていました。

中学校に入学後、バドミントン部の練習を見学に行くと、隣で卓球部が練習をしていました。ボールのピンポンとはねる音がとても快く聞こえ、卓球をしている上級生の、フォームがすごくきれいだったため、バドミントンの見学をしに来たのに、いつの間にか卓球に見入ってしまっていました。学校の帰り道では、もう明日から卓球部に入ろうと決め、母親に卓球部に入ろうと思っている事を告げると、母親は色が黒くならないスポーツだから、賛成をしてくれました。もしここで、母親の反対を受けていたら、私は卓球をしていなかったでしょう。

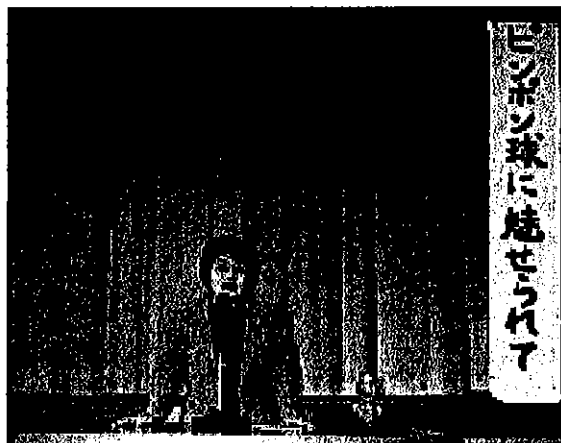
次の日、卓球部の顧問の先生のところに、5・6人の生徒で、意気揚々と行くと、先生から、中間テストの結果を書かされました。「この成績を維持できるという自信がある人だけ、卓球部への入部を許す」と言われ、運動部へ入ることの厳しさを痛感しました。しかし、自分なりに覚悟をし、入部を決めました。

◎ 学業との両立

「成績を下げてはいけない。」という先生に言われた言葉が、なぜかずっと、私の心の中に残っていて、今もクラブの指導を続ける中で、「両立を目指そう。」ということをクラブの目標として掲げています。「成績を下げてはいけない。」という教えは、人生において、とてもよかったと思っております。

◎ 荻村伊知朗選手に感動

クラブには入りましたが、最初は、熱心な生徒ではありませんでした。中学1年生の時に、高知で開催された「日本対ハンガリー・ユーゴ交歓卓球大会」が大きな転機となりました。ヨーロッパのトップの選手と



戦う荻村伊知朗選手のフォームや日の丸がついた紺色のユニフォームに感動させられ、帰るころには「どうせ卓球をするのなら、私もいつか日の丸をつけてプレーしたいな。」という気持ちが芽生えていました。その翌日から練習に取り組む気持ちが変わり、その日から現役をやめる日まで1日もラケットを握らなかった日はありません。「日の丸をつけたい。」と口には出さずに、自分の胸にとどめたまま、自分なりにどのようにしたら日の丸をつけた選手のようにになれるのだろうと考え、まず、高知県で勝つことを目標としました。

◎ シェイクハンドの練習

中学1年生の夏休みの終わりには、ラリーが30本位続くようになり、すごく楽しくなりました。自分では、とても強くなったと内心思っていた時に、先生からシェイクハンドという、やり方も持ち方さえも分からないラケットに変えると言われ、すごく抵抗を感じ、「できません。」と先生に言うと、「やってもみないのに分かるか。」と怒られ、次の日から、シェイクハンドで1週間やってみましたが、上手いかなかったので、先生に「やっぱり出来ませんから、元に戻してください。」とお願いしてみました。すると、「バカヤロウ。1週間ぐらいやって、自分が判断できるようだったら、お前は何をやってもだめだ！まだ、シェイクハンドのラケットを使いなさい。」と言われ、そのことが悔しくて、シェイクハンドのラケットを使い続けました。その当時、シェイクハンドを使う

選手は、とても少なく、守備型と考えられていました。そのまま、攻撃用のラケットを使い続けていた



ら、きっと世界選手権などには、とうてい出場できなかったと思います。守備型が自分にあったのではないかと今になって思うようになりました。

◎ インターハイを見学して

中学3年生の時に、放課後、だれよりも早く練習場に行き素振りや鏡の前でする姿を見ていた先生が中学生の私をインターハイに連れて行ってくれました。そのインターハイを見学して、ラケットと戦型の違いを知ることができ、驚きの連続でした。帰りの電車の中で興奮しながら、「来年のインターハイで、私はシングルスで16位以内に入ります。」と先生に告げました。その後、私は高校2年生の時には、インターハイダブルスで優勝、翌3年生の時には、インターハイダブルスで2位となりました。

◎ 世界大会の選手ではなくトレーナーへ

高校3年生の頃から、大学で卓球がやりたいと思うようになり、親の反対がありましたが、あきらめることができずに、説得し続けました。許しを得て、中央大学へ進学しました。大学では、「浜田、水を得た魚のように練習をしている。」と雑誌に書かれるほど練習が好きでした。体力測定で自分の運動能力がみんなより低いと分かり、より多く練習をしなければ、みんなの運動能力にはついていけないと感じ、4年間、体育館の開け閉めを自分で行う生活を送りました。練習のきちがいだと言われていましたが、練習の成果はなかなか出ませんでした。3年の時に、試合と大学の試験が重なってしまい、色々考えた末、練習を今まで7時間やっていたところを、2時間だけにしてみました。それが、疲れをとることとなり、体調がよくなり、足がよく動き、優勝することができました。

それで、アジア大会の候補に選ばれましたが、最後の最後で落とされてしまいました。インドネシアで行われる試合で、暑いところでは、ボールがはねるため、高く浮くので守備の選手は打たれてしまい、不利になるので、という理由で外されてしまいました。その事で、練習をしても、集中力が切れたりするようになってしまいました。その年の全日本選手権で16位以内に入らなければ、代表には選ばれないというのに、32位という成績であったため、その年の正月は、高知に帰ってのんびりしようかなと思っていたとこ

ろ、世界大会のトレーナーとして合宿に参加して欲しいかという要請がありました。選手を目指し

ていた自分がトレーナーとして合宿に参加することには抵抗を感じ、すぐには、返事ができませんでした。世界選手権の選手の人達の練習相手になるのも、勉強になると思い、トレーナーとして行こうと決心し、返事をしました。

◎ 世界へのデビュー

合宿のなかでやっていくうちに、選手に勝ったりしていたところ、会長が「浜田を候補に追加選手として加える。」と発表し、夢をあきらめずに合宿に参加して、よかったと思いました。会長から「独断で選んだのだから、お前が成績を残すことが出来なかったら、私はやめるつもりだ。」と言われ、責任を感じ、世界大会へ入りました。いろんな国の人と練習をしてもなかなか勝てなかったのも、とても弱気になってしまいました。最後の2週間で腕が腱鞘炎で全然のびなくなり、指までしびれるほど悪化してしまい、せっかく選んでいただいたのに、情けない思いでいっぱいでした。しかし、医師に相談したところ、痛み止めの注射を大会2日前からしてくれることになり、大会後は卓球が出来なくなってもいいというぐらいの心構えで臨みました。注射を打ってもらったら痛み全然がなく、思いっきり振ることが、出来ました。調子がよい悪いも忘れてしまって、ラケットを振れることが嬉しくなり、本番で勝ち進むことが出来ました。それが世界へのデビューでした。

◎ スポーツとは全力でやるべきもの

世界大会でルーマニアのマリア・アレキサンドルさんから、女子のダブルスの誘いを受け、2人で組むことになりました。準決勝で、日本のペアと私達のペアとの戦いとなってしまいました。「本気で戦っているのか」と迷った試合は、この試合が最初で最後でした。私のベンチにはルーマニアのコーチが入り、日本のベンチには日本のコーチが入り、試合が行われました。前日に、同室にいた松崎キミ代さん（日本卓球史上女子で一番強いと言われている）に「悩んでいるでしょう。」と言われ、「悩まなくてもいいから全力でやりなさい。」と激励を受けました。その人は「自分の先輩と世界選手権の決勝で戦わなくてはいけない状況に置かれ、前日に熱を出した私を、次の日に戦わなくてはならないその先輩が徹夜で看病をしてくれた。そ

して、熱が下がり、2人で決勝戦を戦ったことがあった。看病してくれた先輩と全力で戦っていいのかすごく悩んだのだけれど、やっぱりスポーツは全力でやるべきだと思ってやった。先輩が試合に負けてしまったのだけれど、試合後、握手をしてくれたよ。」と話をしてくれました。全力でやるのがフェアなことだと思い、試合にのぞみました。決勝に進むことができ、その決勝で1年半の間、練習してきた技を自然に出すことができ、優勝することができました。



◎ 夢をあきらめずに

ある1つの技術は、練習ではいっばいできていたとしても、本番で使えるようになるには、かなりの時間がかかるのだと感じました。選手時代に、目標を小さい目標と大きい目標に分けて立てたことや、いつも、練習をする時は、期限を切ってやり、最後まで夢をあきらめずに1つの技を納得するまでやった事が自分にはよかったのではないかとと思っています。

◎ 指導者に大切なことは

指導者に大切なことは、「この試合までに、この技術を身につける。」などの期限を切り、時間を逆算した練習を考える事です。そして、根気、新しいアイデアも必要です。自分と選手を同じだと考えずに、10人選手がいると、10通りの練習方法があると考えべきです。若い発想を認め、先入観を捨てないと、選手の本当の力を伸ばす事は、不可能となってしまいます。選手には、無限の可能性があると、日頃から感じながら接していくべきです。松下幸之助さんの「真剣勝負と題して」を読んで、自分に緊張感が欠けていた事を感じました。そして、練習態度が変わり、練習の質が高まりました。

***ここで、浜田先生の講演は終わり、フロアーから、「どんな生徒が伸びるのか」との質問があり、先生は、次のように答えられました。

感謝の気持ちをもてる子が自分の力を発揮しているように思います。私の教え子の中に、運動能力は低いにもかかわらず、インターハイで技術をつかみ、活躍した選手がいます。その年のインターハイの会場では、タイムカプセルで十年後へのメッセージという企画（十年後にメッセージが届く）が行われていました。多くの生徒は、自分へのメッセージを書いていたようですが、その活躍した選手は、私に次のようなメッセージを送っていました。

先生、お元気ですか。

今日は、1988年7月30日です。インターハイ出場のため、兵庫の城崎に尽きました。タイムカプセルのこと覚えていらっしゃいますか。先生はまだ土佐女子で監督をしていらっしゃるでしょうか。私は生きていれば、28歳です。

今の心境は、最後のインターハイなので頑張るしかないというところです。結果はどうか、どうなったかはわかりませんが・・・(中略)

いつまでも厳しく優しい先生でいて下さい。私は先生に本当に迷惑をおかけしたと思います。そんな私に付き合ってくれてありがとうございました。いつまでも卓球を続けてほしいと思います。青春時代を土佐女子卓球部で過ごした事は、私の大きな財産となりました。

お体を大切にしてください。さようなら。

真剣勝負と題して

剣道で面に小手、銅を着けて竹刀で試合をしている間はいくら真剣にやっているようでもまだまだ心に隙がある。打たれても死なないし血もでないからである。しかしこれが木刀で試合するとなればいささか緊張せざるを得ない。打たれば気絶もするし怪我もする。死ぬこともある。まして真剣勝負となれば一閃が直ちに生命にかかわる。勝つこともあればまた負けることもあるなどと暖気なことを言っていられない。勝つか負けるかどちらか一つ。負ければ命がとぶ。真剣になるとはこんな姿をいうのである。

人生は真剣勝負である。だからどんな小さなことにでも生命をかけて真剣にやらなければならない。もちろん窮屈になる必要はすこしもない。しかし長い人生ときには失敗することもあるなどと暖気にかまえていられない。これは失敗したときの慰めの言葉で、はじめからこんな気持ちでいいわけがない。真剣になるかならないか、その度合いによってその人の人生は決まる。大切な一生である。韓い人生である。今からでも決しておそくはない。おたがいに心を新たにして、真剣勝負のつもりで日々ののぞみたいものである。

松下幸之助

道をひらく

以上、浜田先生の講話でした。

リーダーに期待すること

中四国学連会長 腰山静雄

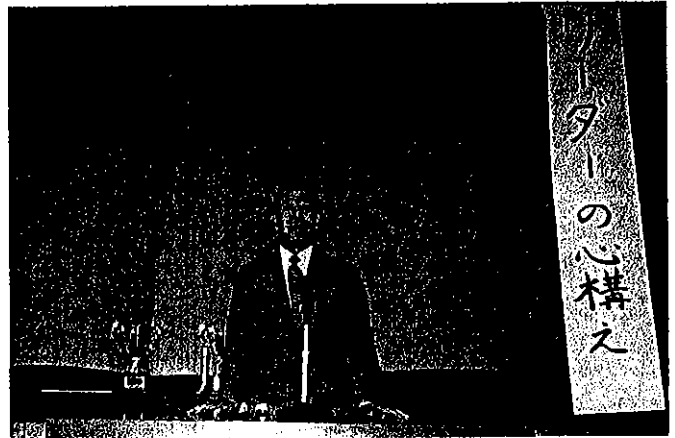
平成11年度の中四国学生剣道連盟の主催するリーダーズゼミが県立青少年センター、野市町立総合体育館において、各大学より多数の参加を得て盛大に開催されたことはご同慶の至りに存じます。

地元開催ということもあり、閉講式の挨拶をという養成を受け出席したもので、講演をする積もりではなく、日ごろ感じている一端を述べたのを記してみました。

さて、中四国の各大学の部活動としての姿勢というか、取り組みはどんなものであろうか。私の狭い範囲での認識では、基礎の修練が足りないのでは、と思われるのです。例えば、稽古にはいる前に基礎と称して切り返し、打ち込み稽古をやっているのであるが、私の言いたいことは「掛り稽古」をやっていない、できていないということである。私は「掛り稽古」と「打ち込み稽古」都は基本的に違うと思っています。打ち込み稽古は正しい打突の習熟には必須のものであるが、掛り稽古は端的にいえば「気」の稽古と考えています。往々にして打ち込み稽古を掛り稽古と称して実践しているのではないかと、見ております。(認識不足、偏見であればお詫びいたします)

剣道においては剣の技法、刀法の習練はいうまでもなく、更には心法の修行も大切なものであり、共に行ずることによって向上し、上達していくものです。難しいことは分からないが、心の問題の中で、特に重要な要因に「気」～気力、気迫、合い気などと言われるが～気をやしなう習練が大切だと指摘されています。まさに、「気」をネルには掛り稽古を徹底して実践することが肝要であろう。「剣を割って入る」という修行は、私は「合い打ち」と考えていますが、そこから強い気が養われるように思っております。

昔から言われているように剣道では(どの武道もそうであろうが)、「打って勝つ」のではなく、「勝って打つ」ことの訓えがあります。この気については「猫の妙術」に精妙に述べられているところであり、自ら「行ずる」以外に会得方法はなかろうと思います。大関出島関が曾て「強くなるには自分より上の者にガンガン撃つかかって、土俵の砂にまみれ、身体が動かなくなるまで掛っていくことだと言っています。これこそが今いう「掛り稽古」と同じことだと思っています。這いも立ちもなくなると、そこから気力を振り絞って立ち向かっていく、その気力が上達につながり、エネルギー源になるのだと思います。



小川虫太郎範士は「自己を離れ、ただ掛り貫くだけ。どうにもならなくなつた時、そこまで行って自己を悟るのである。「窮すれば変ず、変ずれば通ず」と訓えています。

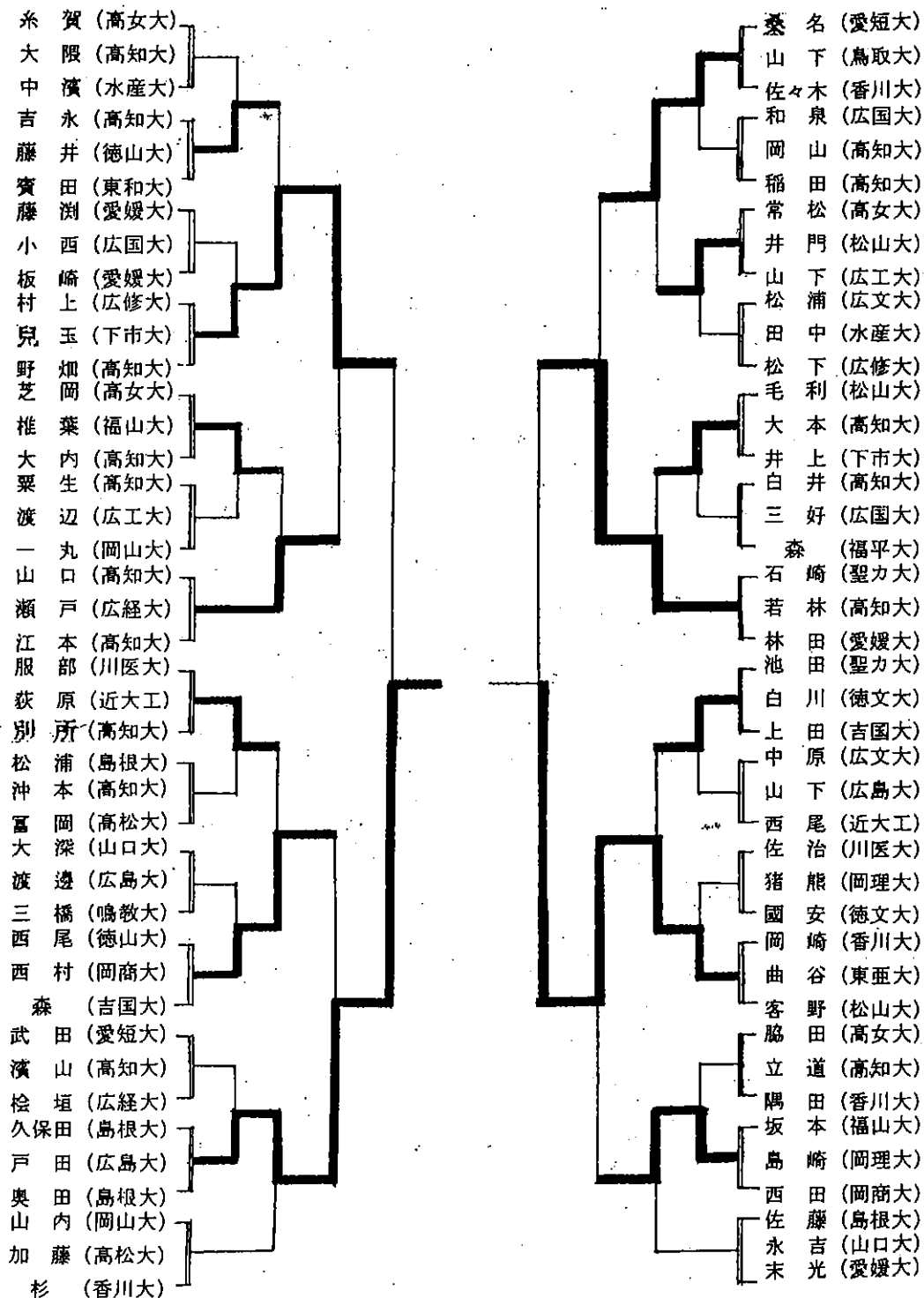
今回のリーダーズゼミに参加の諸君は各大学における指導的立場に立つ者であると思ひ、正しく、強い剣道の実践を通して「剣道の理念」に示される人間形成—自己形成と社会形成—を達成して欲しいものと念願しています。剣道はただ、打ち合いをするだけでなく、もっと深いところを目標にする「行」であって欲しいものです。

千年紀(ミレニアム)の年に修練した剣道の真価を次の21世紀に向かって伝え、発展させていくか、を狙いとして日々研鑽に努められるよう願って、挨拶いたします。

リーダー選手権

審判講習会で審判の勉強をした後は、いよいよ、2日目の目玉であるリーダー選手権が行われました。ランダムに抽選された女子1名・男子2名の混成チームによる、トーナメント大会です。審判も学生同士で、戦う側でも審判する側でも、今回のセミナーでの成果が発揮されました。

* トーナメント表 & 試合



表彰式

接戦がくりひろげられたリーダー選手権も幕を閉じました。チームメイトとの仲も深まったことでしょう。優勝チームに、記念のカップが手渡されました。

*大会結果及び優秀選手については、次の通りです。

優勝 久保田直子（島根大） 戸田元丈（広島大） 奥田俊介（島根大）

準優勝 岡崎友香理（香川大） 曲谷知之（東亜大） 客野雄亮（松山大）

三位 石崎由佳（聖カ大） 若林直樹（高知大） 林田大介（愛媛大）
村上千恵（広修大） 兒玉俊洋（下市大） 野畑厚史（高知大）

最優秀選手賞 戸田元丈（広島大）

優秀選手賞 佐藤文香（島根大） 藤井幹生（徳山大）
別所一宏（高知大） 井上賢司（下市大）
国安直樹（徳文大）

努力賞 村上千恵（広修大）

おめでとうございます。



リーダーズセミナーに参加して

高知大学 OB 橋田速生

平成六年度から始まったリーダーズセミナーが高知で開催されるにあたりご案内いただきましたのでよこんで参加させていただきました。

第一回中四国学生剣道大会が高知大学団体優勝、あわせて個人優勝させていただいた思い出と、今回開催された場所が、私の地元野市町であったことから、何の戸惑いもなくそうさせたのです。

今回は34大学95名のリーダーの参加で充実した二日間であったと思います。宿泊施設の貧弱さと体育館の未完成(国体体操会場の予定)のため大変で不便をおかけいたしました。木原先生、山神先生、大森先生、福多先生、大塚先生とすばらしい指導者の勢揃いで内容のあるすばらしいセミナーに学生達は大きな宝物が出来た事と思いますし、明日からの剣道に大いにはずみがついたのではないかと思います。

又他大学の学生剣士との出会いも一生大切にしたいと思ひます。

私自身数多くではありませんでしたが、稽古できた学生諸君との出会いを大切にしたいと思います。

“継続は力なり”と言ひます。

私自身、昭和29年の大阪での大学全国大会、昭和30年の東京での全国大会(第一回中四国学生剣道大会が中四国地区の予選を兼ねており高知大学と岡山大学が代表)出場の足跡も残りました。また、38年間の高等学校教育の勤務も終わりの10年間は高知県高等学校体育連盟剣道部長として剣道にかかわってきました。定年退職後悠々自適の現在、地元野市町で少年剣士を相手に竹刀を握っている自分に大きな満足感を覚えています。

リーダーズセミナーに参加させていただいた事から感謝申し上げ、中四国学生剣道の今後ますますのご活躍をご期待申し上げます。

なお、橋田先生は、平成5年に発刊された「中四国学生剣道連盟 四十年誌」に学連草創の思い出を次のように書かれています。



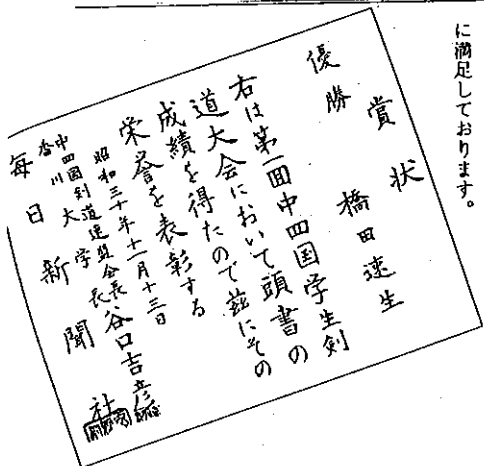
第一回中四国大会優勝
高知大学剣道部昭和三二年卒業
橋田 速生

回顧

昭和三〇年一月一三日。それが第一回中四国学生剣道大会です。全日本学生剣道選手権大会への予選も兼ねていました。
昭和二七年、私が入学をした年に創設した高知大学剣道部でしたがスタートは「しない競技」からでした。
竹を一六本に割って袋をかぶせた竹刀で時間内に数多く打突する競技でした。
翌年には剣道となりましたが、剣道部は予算もなく、部員も団体戦のオーダーがかろうじて組める数しかおらず、大会当日も剣道具は竹胴あり赤胴ありで、袴などもまちまちの姿でした。
しかし松山商大は揃いの道具・稽古着で試合直前の円陣をつくつての準備運動に私達は圧倒され、勝負などあきらめの表情でした。が、本当に幸運に恵まれて団体優勝し、おまけに私は個人優勝もする事ができたのです。
岡山大学(準優勝)と共に中四国の代表として、東京での第三回全日本学生剣道選手権大会への出場権を獲得したのでした。

実はその時の個人優勝の副賞として大小の木刀を頂戴したのですが、それが大会当日に間に合わず、二月四日に行なわれた全日本学生剣道大会への行きがけに、宇高連絡船をおりた宇野で、事務局の方からいただいた事を覚えております。今もその木刀は大事に使わせていただいております。
記録も残っておりますが、個人戦でお相手した剣士も列記しておきたいと思ひます。
一回戦が引頭(香川大)、そして山地(高知大)、山田(岡山大)、高橋(高知大)、優勝戦は松尾(香川大)でした。
あわせて学生時代をふりかえつてみますと、予算がないので大会参加には米持参でお寺へとめてもらったり、又昭和二九年にも四国代表で第二回全日本学生剣道選手権大会に出場できたのですが、純行の夜行列車で朝大阪につき、前日の残りのカレーライスの朝食にありついで大会に参加した事でした。
連盟四〇年の歩み、本当に感無量なものがあります。

中四国大会の優勝が、今日まで剣道を捨てさせる事なく歩んできました。今は地元で少年剣道二〇年目を迎えるようになっておりますし、平成六年三月高等学校長を最後に定年退職しましたが、一〇年間高知県高等学校体育連盟剣道部長もさせていただいた事に満足しております。



「リーダーズセミナー」に寄せて

高知大学剣道部師範 門田 豊

平成11年度中四国学生剣道リーダーズセミナーが、高知で開催されることになり、参加させて戴きました。

スローガンは、「心はいつも太平洋ぜよ」という土佐弁で、若者らしいユニークな発想でありました。参加者は約90名で、民主的な運営の中に規律あり、和気藟々の雰囲気漂っておりました。

開会式に続いて、卓球の元世界チャンピオン浜田美穂先生の「ピンポン球に魅せられて」というテーマで講演を聞きました。

浜田先生は、第31回世界卓球選手権大会(ユーゴスラビア・サラエボ)に、日本代表選手として出場し、ダブルスで優勝の経験を持つ元世界チャンピオンのタイトル保持者であります。「萩村伊智郎先生のこと」「剣道人・剣道界と異質と出会う意味」などを中心に貴重な体験談を、終始謙虚な態度でお話をされました。また資料として戴いたコピーの中に、浜田先生のコラム「スポーツ選手と感謝の気持ち」「父の背中の子守歌」は、心に沁みるものがありました。さらに「一流への憧れ」(藤田厚人)「真剣勝負と題して」(松下幸之助)には、共感の感動を覚えました。リーダーゼ

ミ講演として有意義な選定であったと思います。

初日の合同稽古は、短時間ではあったが、中四国学生剣道リーダーの「交剣知愛」の交流が出来成果があったと信じます。夜の懇親会も盛り上がりおりました。

2日目の「審判講習会」は、木原先生をはじめ全教官の指導で熱心に受講が出来たと思います。審判の最も大切なことは「有効打突の判定」であり、さらに審判の姿勢、態度、審判旗の所作、見える位置への移動等今後習熟の課題が残されております。

抽選にいる「三人制試合」は、親睦にもなり面白い稽古であると思われました。

オプションツアー-亀馬歴史館に行かれた方の感想は如何でしたか。野市青少年センターの体育館は「よさこい国体」の会場として新築中で、御不便をかけました。

終わりに、中四国学生リーダーズセミナーの今後益々の充実発を祈ります。

剣心は平和の心 不動心

平常心を練り合う心

これは、私のメッセージであります。

門田先生には、今回のリーダー選手権大会の賞状すべてを直筆の味わい深い筆跡で作っていただきました。



合同稽古

山神先生の指導の後には、生徒同士に先生も交えて、合同稽古が行われました。日程的に時間が限られるなか、普段、試合以外で剣を交わす機会が少ない参加者達が、リーダーとして学校を代表して集まったこの場で、地稽古に汗を流しました。各校のリーダー達は、所狭しと自分の技を出し合い、熱い熱気と気合いが終始体育館に立ちこめていました。

今回のリーダーズセミナーでの合同稽古は、前回と同様に列を組んで、より多くの人たちと稽古ができるようにという配慮から一回一回、時間を短く区切って行うローテーション形式（回り稽古）で行われました。その為、全員が常に誰かと当たり、限られた時間を余すことなく、より多くの人と稽古をすることができたと思います。また、先生方も列に交じって稽古をつけて下さったために、より実のある稽古ができたのではないのでしょうか。普段はなかなかできない人とも無条件で当たることができ、新鮮さあふれる地稽古になったと思います。

しかし、問題点として、ローテーション形式（回り稽古）のため、自分が稽古してみたい選手と稽古ができなかったという点があげられます。また、時間が短かったため、もっとじっくりしたかったという声もありました。この点については、日程の見直しが必要とされます。



審判講習

リーダー選手権大会に先立って、木原先生のご指導の下、学生審判者講習会が行われました。

学生は普段、公式の場で審判をする機会がないため、正しい審判に対する知識が乏しいのが現状です。そのため、判定があやふやになってしまいがちです。正しい審判技能を身に付け、正確に判定する目を養うことは、上記の状況を改善することにつながるのみで

はなく、試合する側にたったとき、どのようにすれば旗が上がるのかという実践的な面での効果もあり、自分の剣道自体が深まることになります。審判をすることを嫌がらず、進んで勉強し、審判を実践しましょう。

H 12.3.9

リーゼミ審判講習メモ

鳴門教育大 木原資裕

1. 審判理念

- 1) 「審判すること」と「試合すること」の2つができて、1人前である。
- 2) 「1本」の判定基準が、試合者の剣道観を形成する。
- 3) 試合をしている者を引き立たせ、活気ある試合に導く。
- 4) 真剣な審判をすることで、自分の剣道自体が深まる。

2. 審判任務

- 1) 有効打突・反則を見逃さないこと
- 2) 審判規則をよく知っていること
- 3) 公平であること

3. 審判所作

- 1) 立ち姿をカッコよく（背筋を伸ばし、足を閉じる）
- 2) 3人の審判の位置どりの確認
- 3) 宣告をする声に力があること
- 4) 判定にあいまいさを感じた時には、「止め！合議！」
- 5) 旗の扱い方、持ち方、表示法に美意識をもつこと
- 6) 見ている者に、審判の意図がわかるように所作すること

4. その他

- 1) 人間である以上、いつもパーフェクトであり得ない（ミス・誤審は起りうる）
- 2) 有効打突の判定等で旗が別れた場合、審判の交代等の時に、お互いにその処置の妥当性について確認すること。
- 3) 審判をしながら、呼吸の仕方を工夫すると審判が苦痛でなくなる。

～リーゼミを終えて～

中四学連 幹事長 渡辺純一

今年の高知でのリーゼミはいかがだったでしょうか？

目標の1つである「お互いの親睦を深める」ことはできたでしょうか。私渡辺は幹事長として、皆さんの前に立つことは多々ありますが、剣の腕はまだ未熟なため、なかなか広島大の代表として試合に出ることができません。そのため、今までは仕事を通してでしかつながりが無かった方々と、一緒に酒を飲み、剣道もでき、仲良くなれたことは大変うれしく、幸せなことだと思っています。皆さんもこのリーゼミの場を使って、いろいろな人と親睦を深めていただけたらと思います。

我が中四国連盟は、関東や関西に比べれば小規模の連盟です。しかし、小規模だからこそできることだってあります。中四国の大学が互いに交流を深め、それが中四国全体の益々の発展につながることを、切にねがっています。

最後になりましたが、今回、ご指導ご協力を頂いた先生、先輩方に厚く御礼を申し上げると共に、今後の変わらぬご指導の程よろしくお願い申し上げます。加えて、このようなすばらしいリーゼミを作り上げてくれた、岡山君、山口さんをはじめとする高知県内大学の皆様にも厚く御礼申し上げます。計画、準備等いろいろ大変だったと思います。本当にありがとうございました。

～知って得する『知得』のコーナー～

ついに中四国学生剣道連盟のホームページができました。

みなさんどんどんアクセスしてみよう！

アドレス：<http://www.geocities.co.jp/Athlete-Athene/7698/>

心はいつも太平洋ぜよ

実行委員長 岡山文昭

今リーダーゼミを終えて、正直ホッとしているのが私の気持ちです。しかし、リーゼミが始まるまでの1、2ヶ月のことが今でも頭から離れません。

実際、私が大会実行委員長としてやらさせていただくことになりましたが、準備の段階でも副委員長の山口様子さんや大塚先生などに助けていただき「本当に僕がやっていいのかな」と始まるまで正直緊張していました。

大会が始まってみて自分が思った以上に、考えていたことと実際の流れが違って戸惑うことがあり、参加して下さった方々にも多くのご迷惑をおかけしたと思います。また資料作りにしても、いつも大会などでもらっている資料を何も思わず見ていましたが、自分たちで作ってみて、初めてこんなに大変な作業だと分かりました。資料をみんなのことを考えて作ったつもりでも、結果的にはそのようにいかないこともありました。

あと地元の人たちや宿舎の方たちにも何かとお世話になったり、ご迷惑をかけたと思います。

終わってみて自分なりの反省点としては、高知大の学生などの食事や風呂の時間などを割かせてまで一緒に仕事を手伝ってもらったり、先輩方の気配りが十分に出来なかったことです。

今からこういう仕事はないかも知れませんが、この大会によって自分に得たものは計り知れないと思います。資料の作り方や人の前に立って発表することなど誰もが経験できることではないことをさせていただき、大塚先生には大変感謝しています。

最後になりましたがこの大会が無事終了できたのも参加者の皆さん、そして連盟の方々のアドバイスのおかげです。一人では何もできないということが改めて分かりました。

高知でのリーゼミがこれからを占う!

香川大学 山神眞一

春風を感じさせる好天候の中、「心はいつも太平洋せよ」のスローガンのもと、3月9-10日の2日間、高知県野市青少年センターで平成11年度の中四国学生剣道連盟のリーダーゼミが開催された。総勢105名の参加(34大学)は、非常に盛大であった。今回、高知大学の主管(高知女子大、高知学園短大協力)で詳細にわたるタイムスケジュールが立てられ、参加者ひとりひとりの自覚もあり、整然と行われたことに深い感動を覚えた。

開会式の後、浜田美穂先生の「ピンポン玉に魅せられて」の講演を拝聴した。一言で感想を述べるならば、「涙が出た」とても感動的な講演でした。優しく語られる言葉の中にも一途に賭けてきた卓球への想いが胸の奥にジーンと迫ってきた。そして、伸びる選手は、「感謝の気持ちがある人」とさりとら言われた一言には、二の句がでなかった。学生諸君は何を感じたでしょうか?

懇親会は、高知大学剣道部員のリードで大変盛り上がった。私の出番はほとんどなかった(?)が、先生方との交流もあり、充実したひとときであった。

私が担当した稽古については、初日は呼吸を意識するために発声をしない切り返しをやってもらった。初めての体験の人もあり、とまどっていた感もみられたが、良い刺激になったのではなかろうか。地稽古については、できるだけ多くの人と竹刀を交えるように配慮したが、全体的には少し時間が短かったようである。次回の課題としたい。

即席で作った3人制による団体戦、他大学の人と組むこともあって、心の交流も深まり、人格的にも多くの関わりを持てたように感じた。

時間と経費と人数などを考えると、今回のリーゼミの内容は本当に濃くて充実したものであったように思う。その要因としては、参加者の前向きな姿勢と大塚先生や高知大学を中心とした心のもった運営にあったように思う。今回で7回目を迎えたリーダーゼミ、一つの節目であったとともに、21世紀への新たな方向性を占った貴重なリーゼミであったように思えてならない。

リーダーのみんなへー暴力をなくそうぜよー

高知大学 大塚忠義

遠い高知までご苦労様でした。「心はいつも太平洋せよ」はいかがでしたか。

リーゼミはみんなの努力や協力、運営にあたった高知県内の大学剣道部員の仕事ぶり、そして門田、橋田、福多先生等の外部の先生方の丁寧なご指導により成功しました。

みんなが寄せてくれた温かい感想文は、私たちをねぎらうものが多く、リーゼミを引き受けた甲斐がありました。運営にあたった学生が喜びながら育ったことに感謝しています。

私のみんなに期待する一つは、閉会式で言ったように暴力を剣道部から根絶することです。リーダーは、目標に向かって部員を束ねて行くことが仕事です。色々な人柄、能力、生活条件などを持つ人の気持ちをまとめていくことは大変なことでしょう。

思うに任せないことが多いでしょう。腹の立つことでもあります。ですが、殴る蹴るはもちろん、いじめ、無視などはいけません。「愛の鞭」、「活を入れる」など言い古された言葉がありますが、それは嘘です。

また、「剣道は竹刀によるたたき合いだ」。「厳しいものだ」。「だから少しぐらいならば殴ってよい」とか、「程度の問題だ」とか・・・いくらでも暴力を許してしまう風潮が剣道にはあります。

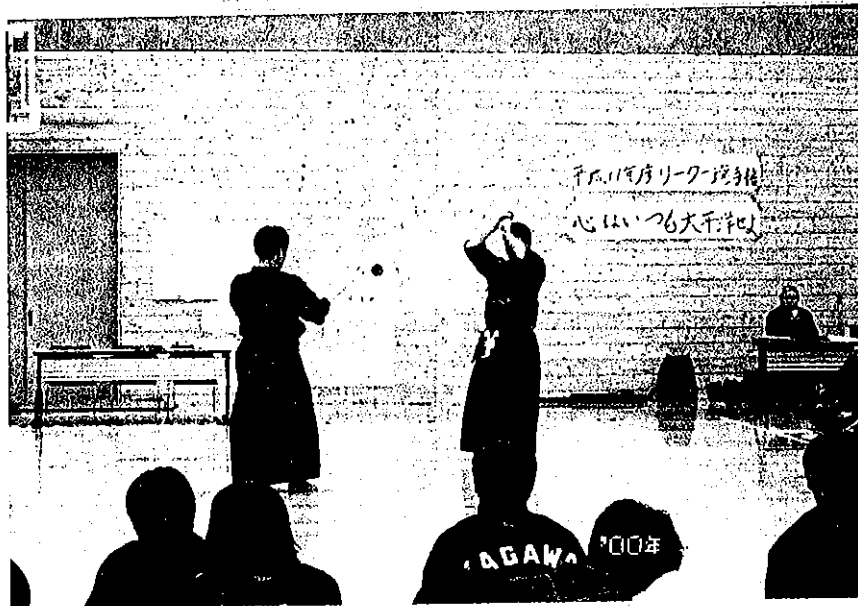
剣道はたたき合いではありません。有効打突を取り合うものです。有効打突は「参った」と心から思う打突です。感動を伴い感動を分け与えるものでしょう。不快な打突ではなく、快感や爽快感を持つ打突です。

いわば、本質は文化的な打突なのです。暴力とは対極にあるのでは。さらにそのような打突を求める過程では、痛い打突、無理矢理な打突なども経験します。いわば、剣士は、稽古を通して暴力の不快さを、最も知っている人と言っても良いでしょう。

それを知る者がなぜ暴力を使うのか、それを使う彼は、剣道を知らない者だし、いわんや剣士ではありません

中四国学生剣道から、その傘下の部活動から暴力や暴力まがいもなくし、より感動のある一撃や剣道を求めることを通じて反暴力の想いを豊にしようではありませんか。

そのことをリーダーのみんなに心からお願いします。



編集後記

今回のリーゼミには、福多先生（鳴門教育大学大学院生・元全日本選手権3位）による上段講座を担当していただき、上段からの小手打ちの秘訣を実演していただきました。

リーゼミ終了後のアンケートを拝見したかぎりにおいては、高知大学剣道部の企画運営に対する賛辞と感謝が多く、リーゼミ自体の評価も高かった。

しかしながら、若干の問題提起もされており、今後の改善点とするため、以下に大要を列挙しておきます。

1. 1泊2日では時間的ゆとりがなく、あわただしい。
2. 稽古時間をもっと取って欲しい。
3. 3分判定では、勝負の決着に若干不満が残る。

今回は、色々とパソコンの編集技術を若干駆使して、報告書を作成してみました。途中、で、息切れした部分もありますが、みなさんによるこんでもらえるよう、内容の充実に関し、努力してまいりたいと思います。